

Into my Packet



後藤滋樹の

新・社会楽

後藤滋樹
goto@goto.info.waseda.ac.jp
早稲田大学 理工学部 情報学科

第27回「自動修正」

あれれ、先程送信したメールがエラーで返送されてきた。

550 goto@goto.info.waseda.ad.jp... Host unknown

そうか。waseda.ad.jp ではなくてac.jp でしたね。これは間違
いだから仕方がないけど、こんなエラーくらいは自動的に直し
てくれてもいい気がするなあ。

【スペルチェックは有効か】

そういえば、メールの本文を英語で書くときには、スペル
チェックのお世話になることが多い。私自身はauthor をauthor
と書いてしまう癖があり、またannounce という単語もよく間違
うので、チェックをすれば安心だ。

スペルチェックは、英語に不慣れな日本人(私)には強力な
助太刀であるが、米国の友人も結構愛用しているという。そ
ういえば、英語版のソフトにはワープロでもお絵描きソ
フトの文字列部分でもスペルチェックが入っている例が
多い。

メールの本文だけでなく、宛て先のアドレスもチェッ
クしてしまえばよいと思うのだが、さてチェックだ
けでなく自動的に修正してしまってもよいもの
だろうか。

【強力なDWIM】

スペルチェックが有効なのは文章に限ら
ない。この方面の興味深い例はInterLISP
というLISP(リズプ)言語に組み込まれていたDWIM という機
能である。DWIM というのはDo What I Mean の略語で、一種
のスペルの自動修正機能である。LISP というのはプログラミング
言語なので「多少のミススペルにかまわずに実行してくれ！」
という思いがDoに込められている。

たとえば、LISPの関数のappend をapend と誤記しても自動
的に修正されるからプログラムはエラーにならずに走る。実際
に経験してみると、これは実に奇妙でアバウトな感覚である。
コンピュータに一種の知能を感じる。

DWIM で傑作だったのは「7abc」と書くとき「7」が引用符「`'`」
に自動修正されて「`'abc`」となることであった。これは「`'`」(ク
オート、引用符)がLISPでは多用されることと、当時のASCII
配列のキーボードでは「7」のキーをシフトして「`'`」を入力して
いたことが理由である。このキー配列は現在の日本語キーボ
ードにも残っている。

私はプログラムを書くときにもスペルを間違えることがある。

Perlなどの言語には修正機能が欲しいと思うこともあるが、
DWIMのような強力な機能は結局普及しなかったようだ。実は、
InterLISPの場合でも自動的に修正してしまうのは行き過ぎだ
と思われるような事例があり、私も実際にはDWIMの機能を
offにして使っていたような気がする。

【電子けんかの防止策】

宛て先アドレスの自動修正には危険なこともありそうだ。ス
ペルが近い人に自動的に配送されたら誤配になってしまう。そ
れでは本文の自動修正はどうだろうか。

以前の專欄で「電子けんかはしつこい」という話題を紹介し
たことがある。つまり、電子メールの上でけんかをするときの
ほうが、口げんかよりも表現が強くなるという現象が観測され
ているのだ。

そこで、私の友人はけんかに使う単語を
自動的に書き換えるようなフィルターを設
けることを提案した。たとえば、「馬鹿」を
「アホ」と変換すると、多少は緩和されるだ
ろう。もっとも、自動修正だから「馬鹿馬
鹿しい」が「アホアホしい」になってしまう。
これでは日本語の乱れを助長してしまう。

やはり、自動ではダメだ。修正はやめて、
けんか用語は発禁として伏せ字にしようか。

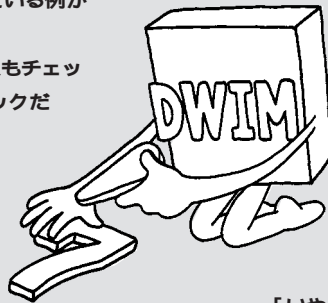
「いや、かえって伏せ字のほうが当事者を興奮させる」と
して議論が尽きない。

【日本語は有利か不利か】

今日では、コンピュータで日本語を扱うのは容易である。し
かし、英語と日本語を比較すると、入力の手間だけを見ても日
本語にハンディがある。かな漢字変換では辞書を引かなければ
ならないからだ。

しかし、見方を変えれば、日本語では最初に辞書を引くところ
で種々の処理が可能である。ミススペルのようなものは、そ
れを変換するように辞書の項目を整えておけばよい。実際に、
そのように工夫された辞書を活用している人もいる。

メールのアドレスには、住所録のようなファイルを活用する
ことも多い。住所録と辞書を一緒にすると叱られるかもしれないが、
情報の保持という点では同類である。日本語の弱点でも
あり、利点でもある辞書の活用法には、まだまだ工夫の余地が
ありそうだ。





[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp